

ウシオツメクサ属の帰化種, ウシオハナツメクサ

大 場 達 之

A Naturalized Species of the Genus *Spergularia*.

Tatsuyuki OHBA

A naturalized species of the genus *Spergularia* established in central and southern Japan since 1949, has been considered as *Spergularia salina* by many Japanese florists. However, it has been definitely shown by the author that *S. bocconii* has been confused with Japanese native *Spergularia salina*.

東京湾沿岸の埋立地や、河口部などの塩分を含んだ土地に、植物体全体に腺毛が多く、淡紅色の花を着けるウシオツメクサの一種が、かなり普通に見られ、今回の神奈川県植物誌調査でもあちこちから採集されている。この植物はウスベニツメクサ（新版千葉県植物誌、宮脇ほか 1975 など）と呼ばれていることが多いが、ウシオツメクサ（長田 1976、浅井ほか 1986 など）とされていることもある。長田 1976 には良い図がある。ただし名前はウシオツメクサとなっている。著者はかつて日本の海岸植生を調査した経験から、これがウシオツメクサとは異なるもので、またウスベニツメクサとも全く違うものであることに気づき、*Spergularia bocconii* (SCHNEELE) ASCHERS. et GRAEBN. ではないかと考えて、ネバリシオツメクサと仮称し神奈川県植物誌調査会の標本もその名前で整理していた。しかし一般には相変わらずウシオツメクサやウスベニツメクサと誤られているようなので、改めて調べ直してみたところ、この植物に対してはすでに松山庫三氏が 1949 年に、江戸川放水路での採集品をもとにウシオハナツメクサの名を与えていることを知った。

ウスベニツメクサ (*Spergularia rubra* (LINN.) PRESL.) は、北半球の温帯に広く分布する植物で、わが国では北海道、東北地方などにしられ、駅の構内の石炭がらを敷いたところや、乾きやすい路上などの人為的な環境にみられ、明治以降の新しい帰化植物であることは間違いないと考えられる。最近、井波一雄氏が

名古屋市の町中で記録しているように、その生態からして本州中部以南にも時折は発生するものと推測できる。しかし神奈川県植物誌の調査ではまだ見つかっていない。大井：日本植物誌では、“海岸の湿った砂地にはえる”とあるが、これは間違っている。ヨーロッパにおいてもウスベニツメクサは内陸の人為的環境にみられ、むしろ乾いた砂質の土地を好む。ウスベニツメクサは托葉が離生して、長く、先端は細かく裂けること、葉は葉腋に短い無花枝があるために数枚の葉が一節に集まって着くこと、花弁は基部から先端まで淡紅紫色で、雄しべが 10 本あることなどで、問題のウシオハナツメクサと区別できる。

ウシオツメクサ（オニツメクサ）は、北海道の塩湿地にかなり普通にみられ、アッケシソウやチシマドジョウツナギなどのあるところには大抵生えている。その生態はアッケシソウにやや似ていて、チシマドジョウツナギなどの多年生の塩湿地草原のあいだの、裸出した泥土上に、単独で小群落をつくることが多い。また標本によると、かつては本州から四国、九州にかけての塩湿地にも広く分布していたらしい。また千島、朝鮮半島、中国の北部にも分布する（図 1）。

ウシオツメクサとウシオハナツメクサとの相違点を挙げると次のようになる。

ウシオツメクサ 茎および葉はおおむね無毛で、時として花序部の茎や葉に腺毛があるものがある。花序はあまり枝分かれせず、もし分枝があれば狭い角度で

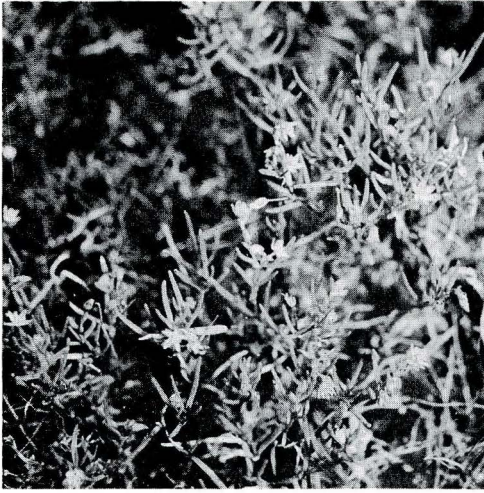


図1 ウシオハナツメクサ, 川崎市六郷。

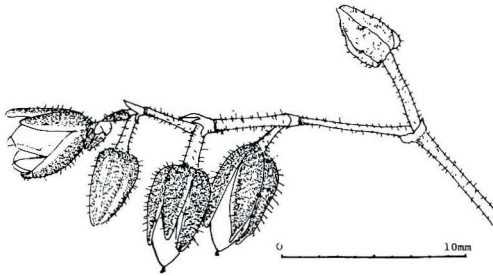


図2 ウシオハナツメクサの花, 花弁は淡紅色であるが基部は白色である。川崎市六郷。

図3 ウシオハナツメクサの花序。花は片方に偏って着く。

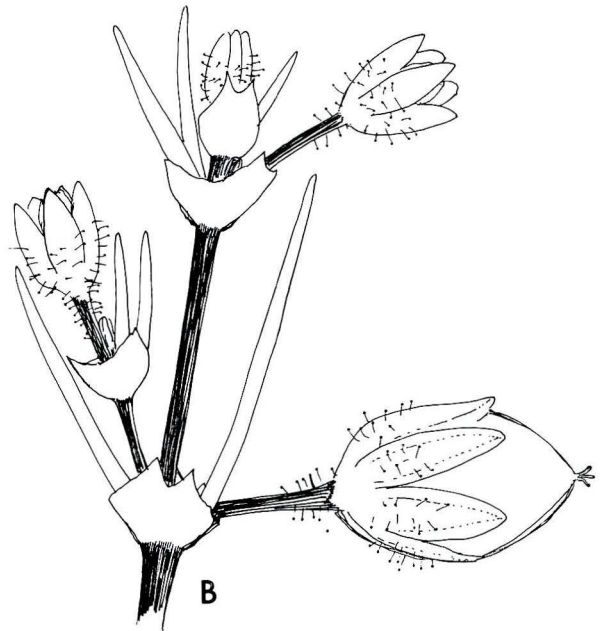
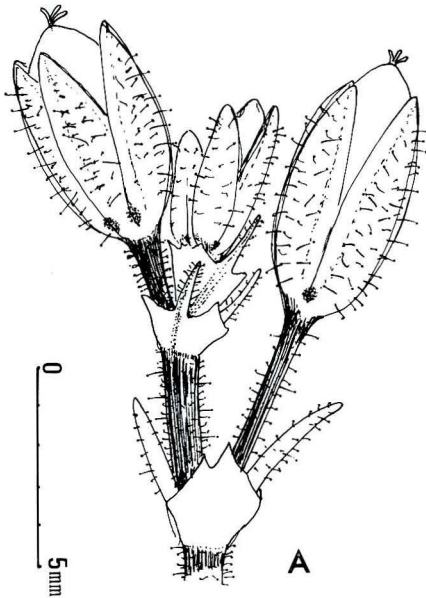


図4 A. ウシオハナツメクサ (川崎市六郷産) と B. ウシオツメクサ (北海道網走卯原内産) の花序上部, ウシオハナツメクサでは花序上部の葉が短く, 托葉と合着する。

斜上する。葉の断面は上面が凸状。葉は上部に至るまで長く、花序の葉は花柄より長い。最上部の葉でも托葉と合着することはない。萼は長さ3～4.5 mm。花弁は白色で時に先端が淡紅色を帯びる。果実は長さ4.5～6 mmで萼より明らかに長く超出する。

ウシオハナツメクサ 植物体の下部を除き、茎および葉は密に腺毛がある。花序はしばしば枝わかれし、枝は広い角度で開出する。葉の断面は上面が平凹である。花序部の葉は短縮し、花柄よりも短く、花序は総状にみえ、花は一側に偏して着く。花序上部の葉は托葉と合着する。萼は長さ5～6 mm。花弁は基部白色で先端に向かって次第に濃い淡紅紫色。果実は長さ5.5～6.5 mmで萼より僅かに長い。

このほかウシオハナツメクサでは萼片と萼片の基部接合部あたりに、はっきりとした濃紫点があることも特徴のように思われるが、この特徴は標本では失われていることが多い。種子は両者とも褐色で腺毛があり、大きさも大差ない。また時に膜質の翼のある種子

が混在する点も同じである。ウシオツメクサは満潮時に冠水するような湿った所だけにみられるが、ウシオハナツメクサは、塩分のある水溜りから、かなり乾いた所にまでみられ、湿った所のものは、葉が長く多肉質で、ウシオツメクサに良く似た姿になるが、上記の特徴で容易に識別できる。

ウシオハナツメクサは戦後日本にひろがったものらしく、著者がみた標本で最も古いのは、上記松山庫三氏の1949年のものである。これが日本在来ウシオツメクサとは全く別の種類であることは明らかであるが、その学名を定めるのはかなり困難である。もっとも近いのは南ヨーロッパ原産で、北アメリカの一部にも帰化している *Spergularia bocconii* であるが、これは *Flora Europaea* などによると、雄しべが10本あることになっている。しかるにウシオハナツメクサでは雄しべは3～5本である。またヨーロッパなどの各種フロラをみると、*Spergularia bocconii* の記載には互いに矛盾する点も少なくない。例えば Zohary : *Flora*

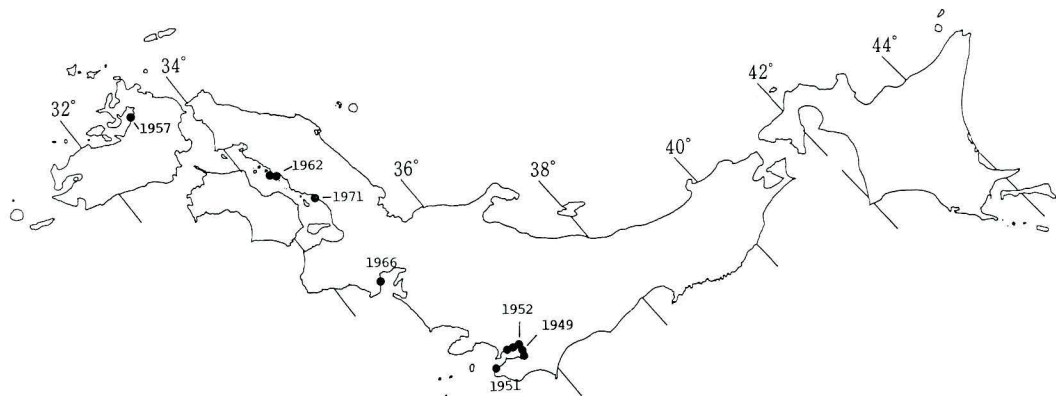


図5 ウシオハナツメクサの日本における分布。その地域における最も早い採集記録年を付加してある。

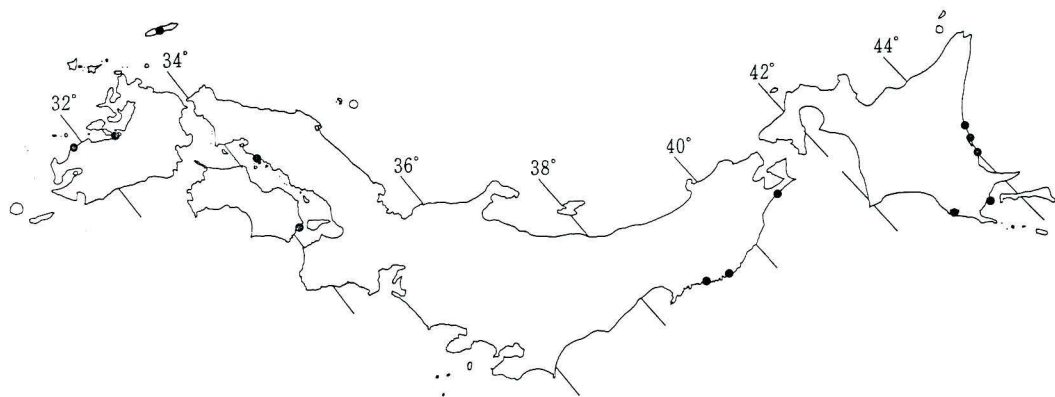


図6 ウツオツメクサの日本における分布。

Palaestina では *Spergularia bocconii* の図に雄しべが5本になっているといったぐあいである。また Flora of the British Isles によれば海岸の乾いた砂地や岩場に生えるとする。しかし茎葉の腺毛の多さ、偏側生の総状花序、萼片よりわずかに長い蒴果、などのウシオハナツメクサの特徴は *Spergularia bocconii* にもっともよく一致する。

桧山1949は、ウシオハナツメクサはウシオツメクサに似ているが少し大形であるとしており、学名に *Spergularia marina* GRIESEBACH をあて、欧州原産としている。これは HARA 1937 が、日本のウシオツメクサはヨーロッパの *Spergularia salina* (S. marina) ではなく、それよりも萼が小さく、花序の葉が長いとして、*Spergularia salina* var. *asiatica* HARA (のちに *Spergularia marina* var. *asiatica* (HARA) HARA と組かえ) という名を与えたことを受けたものであろう。*Spergularia marina* とウシオツメクサの関係は、北アメリカの *Spergularia canadensis* をふくめて、広域的に再検討すべきではあるが、現段階ではウシオツメクサは *Spergularia marina* に含めるのが妥当であろう。ただヨーロッパや北アメリカでは *Spergularia marina* と呼ばれているものの内容は必ずしも単一ではなく、若干混乱があるようにも考えられる。しかし日本のウシオツメクサとヨーロッパの *Spergularia marina* の間には HARA 1973 が指摘したような差が認められるので、日本のウシオツメクサには *Spergularia marina* var. *asiatica* (HARA) HARA を用いるのが良いと思う。

桧山1949のウシオハナツメクサという和名は、*Spergularia marina* に対する名であると断わっているが、その実際の標本はここに述べたように *Spergularia marina* ではなく *Spergularia bocconii* と目されるものである。この和名をどちらに使うか迷うところであるが、*Spergularia bocconii* の実体に対する最初の和名であると考えられるから、一応この和名を採ることにしたい。それに疑義があるとすればネバリシオツメクサと呼びたい。

東京湾の埋立地から採られたこの類の標本は、著者の見たかぎりでは、すべてウシオハナツメクサであるが、かつては日本在来のウシオツメクサも分布していたと考えられるから、その生き残りがみつかる可能性はある。

この報告には、国立科学博物館、神奈川県立博物館、神奈川県植物誌調査会の標本を参照した。

文 献

- 浅井康宏・飯泉 優・加藤喜重・山田隆彦 1986 続江東区の野草. p. 37.
- CLAPHAM, A. R., T. G. TUTIN & E. F. WARBURG 1962 Flora of the British Isles. 2 ed. 258-261.
- FRIEDLICH, H. C. 1979 Caryophyllaceae, Hegi, G. Illustrierte Flora von Mitteleuropa Bd. 3, Teil 2 : 782-789.
- HARA, H. 1937 Observationes ad Plantae Aaiiae Orientalis 13. Journ. Jap. Bot. 13 : 171-178.
- HITCHCOCK, C. L. & J. R. CRONQUIST 1971 Vascular Plants of the Pacific Northwest. pt 2. 296-302.
- 桧山庫三 1949 野外植物新知見. 野草, 15(4) : 1-2.
- 宮脇 昭・奥田重俊・鈴木邦雄 1975 東京湾臨海部の植生. 119pp.
- MONNIER, P. & J. A. RATTER 1964 *Spergularia* (PERR. J. & C. PRESL. TUTIN, T. G. et al (ed.) Flora Europaea 1 : 154-156.
- OBERDORFER, E. 1980 Pflanzensoziologische Exkursionsflora für Süddeutschland und angrenzenden Gebiete 4 Auflage. 365-366.
- 大井次三郎・北川政夫 1983 新日本植物誌. 顕花篇, 647-648.
- 奥山春季編 1979 寺崎日本植物図譜. 第2版, 16 : 2-163.
- 長田武正 1976 原色日本帰化植物図鑑 316-317.
- PIGNATTI, S. 1982 Flora d'Italia 1 : 234-236.
- 遼寧省林業土壤研究所 1975 東北草本植物誌. 3 : 2-3.
- ROSS-CRAIG, STELLA 1951 Drawings of British Plants. 62-66.
- 東京都大田区 1982 大田区自然環境保全基礎調査報告書一大井埋立地南部の自然一. 75pp.
- ZOHARY, M. 1966 Elora Palaestina Text : 122-125, Plates : 171-175.

(神奈川県立博物館)